

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12523

研究課題名（和文）カンボジアにおける宗教的实践と民族間関係：ベトナム人とクメール人の共生をめぐって

研究課題名（英文）Relationship-building between Vietnamese and Khmer Villagers at Rituals in Rural Cambodia

研究代表者

松井 生子（MATSUI, Naruko）

日本女子大学・国際文化学部・研究員

研究者番号：30837597

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はカンボジアで対立するものと捉えられがちなベトナム人とクメール人に関し、カンボジア南東部の村と市場町でフィールドワークをおこない、上座仏教寺院、大乘仏教寺院における両者の交流・協働を調査検討するものであった。調査では、儀礼の場において人々が互いの違いを前提としつつ、相手のやり方を尊重した相互行為をおこなっていることが明らかになった。また、カンボジアの国立文書館の文献調査とフィールドワークでの聞き取りを通して、歴史的にも両者の宗教的实践が時に重なり合い、共生を志向してきたことに関する知見が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カンボジアにおいて、多数派民族であるクメール人と対立する存在と見做され、排除の対象となってきたベトナム人に関する研究の蓄積は少なく、その民族間関係の実情は必ずしも明らかではなかった。両者の対立だけではなく、共生の局面に着目した研究が出始めたのは、ごく近年のことである。本研究はフィールドワークと文献の精査をもとに分析を進め、これまでの言説とは異なる、宗教的实践の場におけるベトナム人とクメール人のお互いへの配慮、歩み寄りを具体的事例を通して明らかにすることができた。本研究は対立の言説や迫害の傍らで、人々が関係を構築し、他者認識を変えていく可能性を探る1つの試みであった。

研究成果の概要（英文）：This study examined relationship-building between Vietnamese and Khmer villagers at Buddhist rituals through ethnographic research in Prey Veng Province located in the southeastern edge of the country and investigation of documents at National Archives of Cambodia in Phnom Penh. Unlike the widespread discourse on tensions between Khmer and Vietnamese, the research revealed their overlapping practices and peaceful interactions at rituals in the countryside presently as well as historical.

研究分野：地域研究

キーワード：カンボジア ベトナム人 民族間関係 多文化共生 宗教的实践 仏教 クメール人

1. 研究開始当初の背景

カンボジアにおいてベトナムにルーツを持つベトナム人は、多数派民族であるクメール人を脅かす存在であるとされ、これまで差別や排除の対象となってきた。このようなベトナム人の他者化の背景には、ベトナムによるカンボジア支配の歴史、文化的な違い、経済的な競合、カンボジアのナショナリズムの問題があるとされる。そして他者化されたベトナム人の側もまた、同国での不安定な法的立場、地方行政関係者による差別的な処遇を経験する中で、自らとクメール人を異なる存在として捉える傾向にあった。

ベトナム人とクメール人はさまざまな特徴によって境界づけられると考えられており、宗教的实践はそのような特徴として語られるものの1つである。これまで調査をおこなってきたカンボジア南東部の村でも、クメール人の村人が上座仏教寺院を中心とした宗教的实践をおこなっているのに対し、ベトナム人の村人の多くは道教や儒教の要素が入った大乘仏教を信仰し、祖先祭祀を重視していた。ベトナム人の村人は一般のクメール人の村人と良好な関係を保ちながらも、クメール人を集合的に他者として捉え、クメール人が信奉する上座仏教に関わろうとしていなかった。

しかし調査村では2010年代から、上座仏教儀礼にベトナム人が参加するなど、境界を越えた宗教的实践の場の共有が目立つようになった。これに伴い、クメール人の伝統として語られることが多かった上座仏教に関して、ベトナム人の仏教実践との相同性を見出すクメール人の村人があられ、ベトナム人の村人の側でも上座仏教に対する距離感が徐々に変化するようになった。この進行中の事象を目の当たりにし、また、調査村近隣でもベトナム人とクメール人が協働する宗教的实践の場を見る機会があり、地域社会全体の空間的・時間的の広がりの中でこの変化を把握し、分析する必要があるようになった。

2. 研究の目的

本研究はカンボジアで対立するものと捉えられがちだったベトナム人とクメール人に関し、現地調査をもとに宗教的实践の場における両者のつながりの形成および他者認識の変容のプロセスを明らかにすることを目的としていた。主たる調査対象はベトナム人とクメール人の交流・協働が見られるカンボジア南東部、メコン河下流域の上座仏教寺院と大乘仏教寺院でおこなわれる儀礼である。現地での生活全体の中で宗教的实践を捉えるために、人々の生活状況と日常生活における民族間関係についても聞き取りと観察をおこなうこととした。

上記のフィールドワークと併せて、カンボジアの国立文書館、フランスの国立海外文書館において、調査地域の宗教的实践と民族間関係の変遷に関する文献調査を実施し、カンボジアにおける民族の共生について歴史的な観点から考察を加えることを目指した。

3. 研究の方法

本研究はフィールドワークと文献調査により構成される。長期的にカンボジアの他地域、国外の事例との比較と、理論的探究をおこなうことを視野に入れつつ、まず調査対象地域の状況を具体的に明らかにし、分析・考察をおこなうことを主眼とした。

当初は4年間の研究期間を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の流行により2020年から2021年にかけて現地調査ができない状態が続いたため、期間を1年延長して研究をおこなった。

(1) フィールドワーク

当該地域の2つの地点でフィールドワークを実施し、儀礼等を参与観察すると共に、日常生活における両者の相互行為を記録・分析した。フィールドワークを実施したのはプレイ・ヴェン州の市場街ネアク・ルアンと、同じくプレイ・ヴェン州でこれまで調査をおこなってきた農村である。

調査村では上座仏教儀礼へのベトナム人の参加について、ネアク・ルアンでは大乘仏教寺院の儀礼へのクメール人の参加について調査を実施し、宗教的实践の場が共有されるようになった背景、儀礼の場における協力と交流、逸脱等への対応を明らかにしようとした。また、日常的な民族間関係についても記録・分析をおこない、宗教的实践における民族間の交流の意味を、現地での生活全体の中で考察しようとした。

(2) 文献調査

当初予定していたフランスでの調査を実施することができなかったものの、カンボジアの国立文書館で植民地期から内戦前までの調査地域の文書を中心に歴史資料を収集し、宗教的实践

と民族間関係の変遷、社会的状況との関わりについて分析をおこなった。

4. 研究成果

(1) 宗教的実践の場

調査対象地域では、以下の宗教的実践の場について参与観察または聞き取りをおこなった。

ネアク・ルアンの大乘仏教寺院：

大乘仏教寺院の福德寺にて2019年と2022年に陰暦7月15日（中元節）の儀礼に参加し、記録・観察をおこなった。福德寺はベトナム人と、ベトナム系または華人系のクメール人の崇敬を集めている。住職はベトナム人であるが、クメール人の信徒・参詣者向けにクメール語の配布物を作成し、境内もクメール語での表示をおこなうなど、クメール人向けの工夫が見られる。儀礼日以外に訪問した際には、クメール人女性が同寺院を訪れ、住職に祈禱を依頼していた。

村の上座仏教寺院：

調査村の人々が参詣するトアムレアンサイ寺にて、2023年10月にカンボジア最大の仏教儀礼であるプチュム・バン儀礼の参与観察をおこなった。参詣者の大多数は調査村および近隣の村のクメール人だが、ベトナム人の村人の姿も見られた。同寺院では感染症の流行が著しかった2020年と2021年に人々が集まる儀礼が禁止されたということだったが、その中断を経て、今また再びベトナム人の参詣者が増加している。

ベトナム人の村人が設けた「寺」：

調査村にはベトナム人の村人が自宅の敷地内に仏像を安置して設けた「寺」があり、ほぼ毎年、陰暦7月15日に上座仏教僧を招いた儀礼をおこなっていた。2019年はクメール人とベトナム人が交流する場となっていたこの儀礼に参加し、調査をおこなった。2022年は体調不良のために参与観察ができなかったが、儀礼の参加者にその様相について聞き取りをおこなうことができた。その後、この「寺」は建物が置かれた土地が川の浸食によって崩落したため、2023年にその役割を終え、仏像は前述のトアムレアンサイ寺に寄進されることになった。

遠方の寺院への参詣：2023年10月のプチュム・バン儀礼期間におこなった聞き取りによると、ベトナム人の若者の間で、娯楽のために調査地域内の別の村にある上座仏教寺院を訪れ、ついでに参詣もおこなうという新しい傾向が見られることが明らかになった。

(2) 儀礼の場の共有がもたらすもの

近年の調査村における儀礼の場の共有の背景として、通婚の増加が挙げられる。クメール人との結婚後に上座仏教寺院に参詣するようになったベトナム人がいるほか、ベトナム人がおこなう祖先祭祀の儀礼においてクメール人の配偶者とその親が準備を手伝うことも見られる。

また、ベトナム人の村人は大乘仏教寺院に参詣することを良い行為であると捉えているが、その対象が上座仏教寺院にも拡大している。聞き取りにおいて、上座仏教寺院のベトナム人の参詣者らは自らの参詣について、大乘仏教寺院に参詣する場合と同様に、「寺に参詣することは良いことだ」と語っていた。上座仏教寺院へのベトナム人の参詣者数が増えることで、この認識は参詣者以外のベトナム人の村人にも広がり、結果として上座仏教に対する心理的な垣根が低くなっているようである。

他方、クメール人の村人にとって上座仏教寺院の寺院に参詣し、あるいは寄進をおこなうことは、来世を視野に入れ功德を積む行為である。同時に、それらは現世において人々に評価され、信望を集める行為でもある。ベトナム人の村人の参詣は、クメール人の村人の間で彼らに対する評価を向上させるものとなっている。

(3) 他者の受容 / 他者性の後退

調査によると、大乘仏教寺院に参詣するクメール人の大半はベトナム系または華人系であり、ベトナム人にとって彼らに近しいと捉えられている人々であった。これに対し、上座仏教寺院では一般のクメール人との接触と交流がより顕著になる。

上座仏教寺院で観察すると、ベトナム人の参詣者は当初、上座仏教式の儀礼の手順に不慣れである。しかしクメール人の寺院世話役および参詣者はそれを許容し、彼らを迎え入れている。ベトナム人の参詣者の参拝の仕方に逸脱があっても、それを注意したり咎めたりすることはなかった。ベトナム人の村人にとって、上座仏教儀礼の作法を習得し身に付けていくことは、その儀礼の場を尊重し、クメール人の信徒に寄り添うことでもある。参詣を重ねるとそれらのベトナム人も手順に習熟し、儀礼の場で異質性が意識されることがほとんどなくなっている。

儀礼の場では両者共に、互いに違いがあることを前提としつつ、相手を尊重した相互行為がなされていた。このような対面的な接触の場は、両者の共生の認識、お互いのつながりの感覚を促し、両者の対話を拡大していくことにつながると思われる。

(4) 通時的分析

カンボジアの国立文書館の資料では、植民地期から内戦前にかけての調査対象地域の社会・経済的状况についての情報を得ることができたほか、20世紀前半にベトナムの新興宗教であるカオダイ教がカンボジアのベトナム人とクメール人から熱狂的な支持を受けるなど、宗教的実践面で越境的な状況があったことが明らかになった。聞き取りにおいても、内戦前の調査村において上座仏教寺院に積極的に関わるベトナム人がいたことが判明している。調査対象とした地域は1970年代の内戦以前にベトナム人が多数居住し、長きにわたるクメール人との関係の歴史を持っている。通時的に見ると、内戦とポル・ポト政権時代の住民の移動を経て分断されていた両者の宗教的実践が、今また再び重なりつつあるようである。

文献調査では、民族間の非対称的な関係性を生じさせる一因となっているベトナム人の法的立場の変遷についても、近年の新しい法令を確認し、分析を進めることができた。

研究期間中、感染症の流行によって現地調査が制限を受け、本研究課題にとって重要なブチュム・バン儀礼の参与観察が予定よりも大幅に遅れ、最終年度の実施となった。このため研究成果をまとめる作業に遅れが生じたが、今後、最終的な調査分析を論文等で漸次公開していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松井生子
2. 発表標題 その後の「上座仏教との関わり方」：カンボジア南東部の村におけるベトナム人の宗教的実践のこの10年間の変化
3. 学会等名 日本カンボジア研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Matsui Naruko
2. 発表標題 Living in Cambodia as Stateless Vietnamese: A Case Study of a Village in the Lower Mekong Basin
3. 学会等名 CALE-MLS Workshop, Nationality Struggles in the 21 Century and its Social Costs in Asia
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松井生子
2. 発表標題 カンボジアの国籍関連法と実践に見る1990年代以降の変化：ベトナム人との関わりを中心に
3. 学会等名 カンボジア特集研究会（「体制移行」の比較解剖学：グローバリズム下の社会レジーム再編に関する総合的研究，19H00559，2019-2023年度，代表：小林知）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 越智 郁乃、関 恒樹、長坂 格、松井 生子、上水流久彦、玉城毅、ハリス田川泉、栗田梨津子、新本万里子、新本万里子、中岡志保、岡田菜穂子、川崎和也、中村八重	4. 発行年 2021年
2. 出版社 七月社	5. 総ページ数 400
3. 書名 グローバリゼーションとつながりの人類学	

1. 著者名 土佐桂子・田村克己・伊野憲治・飯國有佳子・テツテツティ・岡本正明・藏本龍介・斎藤紋子・高谷紀夫・生駒美樹・松井生子・田村慶子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 334
3. 書名 転換期のミャンマーを生きる：「統制」と公共性の人類学	

1. 著者名 小林 知、山田裕史、新谷春乃、米倉雪子、初鹿野直美、矢倉研二郎、倉島孝行、高橋美和、松井生子、千田沙也加、羽谷沙織、田畑幸嗣	4. 発行年 2024年
2. 出版社 めこん	5. 総ページ数 580
3. 書名 カンボジアは変わったのか：「体制移行」の長期観察1993～2023	

〔産業財産権〕

〔その他〕

松井生子：2020「新型コロナウイルス感染症流行下の調査村（カンボジア・プレイヴェン州）：フィールドの母との対話で考えたこと」FENICS メルマガ Vol.75 2020/10/25

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関